金子光男編著『経済思想史』

メタデータ	言語: jpn 出版者: 明治大学政治経済学部 公開日: 2010-03-09 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 藏本, 忍 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10291/8199

立場から、「教育する」「教える」側に欠けている配慮や資質とは何であるのかについて、耳の痛くなる指摘が随所に見られる。もちろん初等中等教育と大学教育とでは異なる面も数多くあるだろう。しかし、教育におけるヴォランタリー性という一点においては、乳幼児保育から大学まで変わるところのない部分も存在する。大学教育においてそれがどのように発揮されるべきかについて考えることは、教育制度全体の中での今後の大学なるものの位置づけや大学教員の役割について、「教える」という具体的場面に即して思考し実践するきっかけを与えてくれるに違いない。

金子光男編著『経済思想史』

（八千代出版、二〇〇四）

藏本　忍

惟うに、近年学生の歴史への関心はとみに薄れているようである。時間のより一層速い流れが学生に立ち止まって振り返ることを躊躇させるのか、あるいは関心の多様化が事柄の焦点を拡散させ、何が重要な問題かについての焦点を正しく結ばせないのか、あるいはまたただ単に怠惰なだけなのか、その理由は定かではない。私のゼミの学生について言えば、直ぐに役立つ知識への欲求はあるにしても、歴史への関心はほとんどない。経済学の歴史を問うても無駄である。例えば、彼らにとってジョン・スチュアート・ミルは『自由論』や『女性の解放』の著者であって、『経済学原理』の著者ではない。

こうした状況を反映してか、本書が編まれた。編著者の「序にかえて」に記されているように、本書は経済学史・思想史の初学者のための入門書・教科書であり、「主義」と「学派」に纏められて分かりやすく論述されている。編著者によれば、経済思想史・経済学説史・経済理論史の関係はこの順序で抽象度が高くなる。本書のタイトルになっている経済思想史は、主として理論が形成される「周辺領域」、あるいは「思想の星雲状態」に目配りして、理論や思想を重層的に理解しようとするものである、ということになる。

本書の構成は以下の通りである。第一章「重商主義」（金子光男）、第二章「重農主義」（長峰　章）、第

三章「古典派経済学」（遠藤哲広）、第四章「マルクスの社会思想と政治経済学批判」（生方　卓）、第五章「歴史学派経済学」（原田哲史）、第六章「限界革命：ミクロ経済学の源流」（飯田和人）、第七章「一九三〇年代とケインズ革命」（飯田和人）、「経済思想史年表」（奥山　誠）。以下、簡単に各章の内容を概観して見てみよう。

第一章の「重商主義」は、絶対王政が成立する一五世紀半ばから産業革命が開始される一八世紀半ばの三〇〇年間にわたってヨーロッパ各国を支配した経済政策と経済思想の総称とされる。この時代はいわゆる資本の原始的蓄積期である。トーマス・マン、ウィリアム・ペティ、デビッド・ヒュームと時代が下るにつれて、分析の中心が流通から生産へ移行していき、そして最後にスミスの『諸国民の富』第四編「政治経済学の諸体系について」のなかで徹底的に批判される。

第二章の「重農主義」はコルベール主義（重商主義）の失敗の結果、疲弊したフランスの国力と経済の再建を図るために、ケネーを中心として農業の振興に力を注いだ一群の人々の思想と運動である。特に、ケネーは農業だけが純生産物を生産するから、農業者階級だけを生産的階級とみなし、商工業者階級を不生産的階級とみなした。これがスミスによって批判されることになるが、しかしケネーの「経済表」はその後マルクスの再生産表式やレオンチェフの産業連関表に継受され、経済学に多大な影響を及ぼした。

第三章の「古典派経済学」は主としてアダム・スミス、リカードウ、J・S・ミルの三者を取り上げ、マルサスをリカードウとの関連でのみ論じている。客観的価値論（労働価値論）とその純化という観点からすれば、古典派経済学の主流はスミスとリカードウということになるのだろう。彼らの功績は旧体制の桎梏を排除して、新興の産業資本の利害を代弁し、新たな経済社会の自由で自律した発展の道筋を整えたことである。しかし、一九世紀半ばのミルの時代になると、資本主義の問題点が次第に明らかになり、特に分配における修正が必要になっていた。

第四章の「マルクスの社会思想と政治経済学批判」は出発点としてのヘーゲル哲学研究とその批判から始まって、ヘーゲル左派に依拠した現状批判と市民社会を理解する鍵としての経済学研究へと移行していくマルクスの思想遍歴と思想の進化・深化を論じている。

マルクスの主著『資本論』第一部初版が出版されたのは一八六七年であり、その副題は「政治経済学の批判」であった。この著作の究極目的は「近代社会の経済的運動法則を暴露すること」であった。

第五章の「歴史学派経済学」は旧歴史学派（ロッシャー、ヒルデブラント、クニース）、新歴史学派、あるいは「講壇社会主義」（シュモラー、ブレンターノ）、最新歴史学派（ヴェーバー、ゾンバルト、ザリーン、シュピートホフ）に分けられる。旧歴史学派は一九世紀半ば頃のドイツ資本主義の形成期における経済学であり、イギリスの古典派経済学とは異なる方法を模索した。新歴史学派は一九世紀後半のドイツ資本主義確立期の経済学であり、資本主義の弊害としての社会問題（労働者問題）を解決するために、積極的に社会政策を提案した。最新歴史学派は二〇世紀初頭にドイツが帝国主義の段階に達した時代の経済学であり、政治的・社会的実践よりも学問に没頭し、旧・新歴史学派の研究方法を再検討した。

第六章の「限界革命：ミクロ経済学の源流」は従来の客観的価値学説に対して主観的価値学説を成立させた。一八七〇年代初頭にほぼ同時に、オーストリアのカール・メンガー、イギリスのウィリアム・S・ジェボンズ、スイスのレオン・ワルラスの三者が限界概念ないし限界分析によって交換に基づいた新たな経済学を構築した。彼らは財の消費による諸個人の欲望満足度を効用と呼び、追加一単位当たりの（あるいは最終一単位当たりの）欲望満足度を限界効用と名づけた。この理論は限界効用逓減の法則と限界効用均等の法則から成り立っている。この章では、さらにケンブリッジ学派（新古典派経済学）の創設者であるアルフレッド・マーシャルも取り上げられている。

第七章の「一九三〇年代とケインズ革命」は経済学が再び大きく変化する時代である。それは第一に、限界革命によって成立した三つの学派が新古典派経済学として一つの学派に統合され、ミクロ経済学が完成されたことである。第二に、三〇年代の世界恐慌を契機として国民所得水準の変化とその原因の分析を研究の中心に据えたマクロ経済学としてのケインズ経済学が成立したことである。

本書は網羅的、かつ体系的に構成されており、しかも初学者を対象としていることから、総じて平明な文章で書かれているので、分かりやすいという利点を持

っている。学生にぜひ一読を勧めたい書である。

しかしながら、残念な点もある。本書には正誤表が付されているが、それ以外にも四〇ヶ所以上の誤植・誤記・事実誤認などが散見される。経済思想史の専門家ではない評者のことであるから、思わぬ読み違いがあるかもしれない。その場合には、ご寛恕願いたい。